

## ミャンマー国境経済視察 調査報告 平成 23 年 3 月

中小企業診断士 都築 治

平成 23 年 3 月 16 日（水）～27 日（日）の日程でミャンマー各地を訪れ、経済発展する中国の進出状況や道路事情などを調査した。

### 1 調査の目的

近年ミャンマーは目覚ましい発展を遂げており、その中でも中国との関連が取り分け注目されている。中国の影響下にあるとされている国境に近いカチン州ミッチーナ、バモー、シャン州ナムカン、ムセ、ラショー、マンダレー地域ピンウールウィン、マンダレーなどを現地踏査し、地理学的な手法、中小企業診断士としての環境調査の手法を活かして、中国経済の影響度等を調べることを目的とした。

### 2 日程

- 3/16（水） 羽田発(TG661) 00：20  
ヤンゴン着(TG303) 08：45  
★MIA (Myanmar Industries Association)  
U Paw Hein 会長  
U Zaw Min Win 商工会議所連盟副会頭
- 3/17（木） ★ミャンマー日本友好協会  
U Ye Htut 事務局長  
★Shan Maw Myae Co.,LTD  
U Nyan Linn
- 3/18（金） ☆買い物  
国旗、ミャンマー語書籍  
★アジア母子福祉協会ヤンゴン事務所  
U Khin Maung Soe 代表  
★JETRO ヤンゴン事務所  
水谷俊博所長
- 3/19（土） ヤンゴン発 エアーバガン 8：00  
マンダレー 9：00 着  
★サウンダー織物学院 アマラプラー  
齋藤秀一氏、羽藤世浩(株)ハイメン社長他  
★ムスリム居住区  
☆操り人形
- 3/20（日） マンダレー発 (W9-255) 8：35

- ミッチーナ 9:40 着  
 ☆ミッソン  
 ★州立博物館  
 ★ST. COLAM BAN'S CATHEDRAL
- 3/21 (月) ☆マーケット  
 地元産買い物  
 ★YMCA  
 東京外語大西研究員、熊本 YMCA 桐原奈緒子氏他  
 ミッチーナ発 11:30  
 道路事情調査 (敷石の道路)  
 バモー着 17:30
- 3/22 (火) ☆マーケット  
 ★バモー港 (河川港開発の様子)  
 ★中国寺院  
 ★華人基督協会  
 ☆サンパナゴ  
 シャン藩王館跡  
 バモー発 10:00  
 道路事情調査 (デコボコ道)  
 ナムカン着 18:20  
 ムセ着 19:00
- 3/23 (水) ★国境ゲート  
 ★国境の街踏査  
 ★市街地踏査  
 ムセ発 11:00  
 道路事情調査 (大型車、オートバイの数)  
 クッカイ着 14:00  
 (町の様子調査)  
 ラショー着 15:50  
 ★中国大乘仏教寺院  
 ☆夜市 (ニャゼエー)
- 3/24 (木) ラショー発 10:00  
 ティーボー着 11:30  
 ★ナツ神殿  
 ★旧藩王邸  
 ☆マハミヤムニ・パヤー、ボージョー・パヤー

- ☆ペイチンミャウン洞窟  
ピンウルウィン着 19:00
- 3/25 (金) ☆マーケット  
ピンウルウィン発 11:00  
★サイバーシティ (ヤダナーボン)  
Daw Zar Chi Oo、U Yan Naung Soe  
マンダレー着 15:00  
★マンダレーYMCA
- 3/26 (土) マンダレー発 アジアン ウィングス エアウェイ 9:35  
ヤンゴン着 11:15  
★U Shein Kyi  
MIA 理事  
★中華街
- 3/27 (日) ヤンゴン発(TG304) 09:50  
羽田着(TG660) 22:10

### 3 調査員

- 都築 治 特定非営利活動法人ザ・コンサルタンツ ミャンマー 理事長  
社団法人日本ミャンマー友好協会 常任理事・関東支部長  
経済産業大臣登録 中小企業診断士
- 浅野静二 特定非営利活動法人ザ・コンサルタンツ ミャンマー 理事  
社団法人日本ミャンマー友好協会 会員  
上智大学大学院 修士、ミャンマー語通訳

### 4 調査・ヒアリングの概要

#### (1) 3/16

##### ■ミャンマー商工会議所内 MIA

- ・ U Paw Hein 会長、U Zaw Min Win 商工会議所副会頭との会談  
U Zaw Min Win より地震の見舞いの言葉。ミャンマー側から見る、厳しい日本経済（雇用問題等）の現状認識に関する話があった。  
技術者就業提携事業等について話す。

#### (2) 3/17

##### ■ミャンマー日本友好協会

- ・ U Ye Htut 事務局長



イエトゥツ氏と名倉氏

宝石、蜂蜜、こんにゃく、中国事情等について話し合う。日本の技術とミャンマーの資源が結びつければ、すごいことになる。

■Shan Maw Myae Co.,LTD

・ U Nyan Linn

今後の事業展開について、JICA 事業等。

(3) 3/18

■アジア母子福祉協会ヤンゴン事務所

・ U Khin Maung Soe 代表

芹洋子ミャンマー公演等について。

■JETRO ヤンゴン事務所

・ 水谷俊博所長

経営・技術指導について討議するが、予算削減で大変とのこと。

(4) 3/19

■サウンダー織物学院（アマラプラー）

・ 齋藤秀一氏、羽藤世浩(株)ハイメン社長他

織物、手工芸品の技術指導の話を聞く。一村一品運動、品質指導、デザイン指導等に関わっているが、漆の植林、有機栽培等についても支援活動を行っているとの説明があった。

■ムスリム居住区

・ 中国系ミャンマー人ムスリム

仕事の内容、いつから現住所に居住するようになったか等を聞く。ピンマナに店を持っている。

(5) 3/20

■ミッソン（エーヤワディ川の源流）

砂金採集のため川岸がえぐられて、景観が変貌している。カチン州では翡翠はもちろん砂金もよく採れる

■ミッチーナ市街

最北の州都で、静かなたたずまいの街となっている。中国の国境に近いが、主要交易路とは少し離れており、経済発展の視点からはそのスピードが遅いように感じられる。中心



商店街は、州都としては寂しい。しかし、マーケットは州都に相応しく充実している。街の中ではオートバイの多さが目立つ。

キリスト教の教会が多く、パヤーやモスクも多数見られる。カチン、シャン、バマーを始め、中国系、インド系その他の少数民族が共存して生活しており、違和感がない。十字架が架かった家が少し減少しているように感じられる。特質すべきは、翡翠で金持ちとなったと思われる豪邸が目立つようになったことである。

## (6) 3/21

### ■レド公路（ミッチーナ～バモー）



前回（99年8月）は、早朝にミッチーナを発ち夕方バモーに着いたが、今回は11時30分頃ミッチーナを発ち、17時30分にバモーに着いた。所要時間6時間である。

道路は少し整備され、石で敷き詰められている。車はガタガタして走る。バモーに近づくと、以前と同じような悪路となるが、行き交うオートバイの数が目立つ。

途中の集落は中国系の住民が多い。娘を大学に通わせ、卒業記念の写真が飾ってあるのが見られる。ミャンマーの各地では、子息の大学卒業の写真が飾ってあるのがよく見られる。

前は州兵や民兵などが要所所でゲートを持ち、通行税を徴収しチェックを行っていたが、今回は中国に至る分岐点1か所でチェックを受けただけである。ミャンマー政府の力が強まっているのが分かる。

## (7) 3/22

### ■バモー

バモーの市街地は、前回訪れた時は日本名の商店が目立ったが、今回は注意して見ないと分からないぐらいになっていた。日本の存在感がここでも薄れているように感じられる。

バモーは、古来中国との主要交易ルートの一つで中国系住民も多いが、経済成長のスピードは爆発的ではない。街の中では4・5階建ての建物が目立つようになった。緩やかな経済の伸びを示してい



フレンドシップ・ホテル

るようである。しかし、高層ビルは見られない。

オートバイの普及は目覚ましい。街路から見る限り、最貧国のイメージはいささかも感じられない。市内にはモスクや中国バプティスト教会があるなど、信仰の自由は十分に保たれている。中国仏教寺院もある。そこでは、子丑寅の十二支の像が見られた。

バモーやミッチーナなど、中国の国境に近い地域は中国の影響は少なくはないが、中国化されているよりも、むしろ中国国境から移り住んだ人たちをうまく取り込んでいるように感じられる。

#### ■バモー港



バモーの河川港は大河エーヤワディ川にあり、中国との交易の拠点として注目されている。そのために、10年程前から中国が港の整備を進めているとのメディアの報道があったが、いまだにその整備は進んでいない。

バモーからはマンダレー、ヤンゴンに船で大量に荷を運ぶことができる。交易の主導権を中国に渡すことが嫌なためか

港の整備は遅々としている。中国にうまく対処するミャンマー政権のしたたかさを、ここでも垣間見ることができる。

#### ■レッド公路（バモー～ナムカン～ムセ）

イギリス軍の、インドから重慶に至る蒋介石政府支援ルートである。バモー～ムセ間は近く、道路事情は格段に良くなっているものと考えていたが、以前と同じ悪路のままであった。前は雨季にも関わらず6時間の行程であったが、今回は9時間も掛ってしまった。運転手が自分の車が痛むのを嫌がってノロノロ運転した所為（平均時速15km程度）としか考えられない。



99年8月



11年3月

道路幅は少し広くなっており、行き交う大型車の数が3・4倍程度は増えていた。



以前は見られなかったオートバイが多数見られた。途中の集落は汚く貧乏くさい感じであったが、そこで食事をして不衛生に感じられない程度になっている。車の方も中古車ではあるが、比較的新しい車が多数になっていた。

肝心のナムカンの街の様子は、暗くなっていたため、賑やかさを増している程度しか分からなかった。人出は確かに多く、町の経済成長が窺われる。

(8) 3/23

■ムセ 中国国境ゲート

99年8月



11年3月



中国の国境のゲートの周辺は様変わりしていた。好調(?)な中国経済を反映してか、国境貿易でムセは賑わっていた。多数のミャンマー人が、ゲートの近くにあるイミグレーションで許可を得てゲートを通り抜ける。ミャンマー側には、貿易に関連する多くの店や事務所がある。

少数民族らしい若者の往来が多い。彼らのほとんどは黒っぽい服装で、ズボンの折り目がないことや着こなしが巧くないため、貧乏くさく見える。中国人と比べるとその差が一目瞭然である。テレビでよく見る、北朝鮮の貧しそうに見える住民そのものである。彼らの服装だけで判断してはならない。つい最近まで人里離れた山の中で暮らしており、ファッションに縁がなかっただけかも知れない。

ここでは、中国の影響のさまをつぶさに知る。ムセからラショー、ピンウールウ

インに掛けては、ミャンマーが中国化している様子を窺うことができる。しかしミッチーナやマンダレーなどは、中国化しているよりも、むしろミャンマー側が中国を徐々に同化させているような印象を受ける。ミャンマーの奥深さである。

#### ■ムセ中心地



ムセの中心地は国境のゲートから少し離れた所にある。ムセの町は予想通りの賑わいの街となっていた。前回訪れた時は、日本製の偽物とおぼしき電気製品などが多く見られたが、今回はファッション関連の商品が多く見られた。

オートバイの価格は中国製 8 万円、日本製 15 万円程度らしい。

#### ■援蒋ルート

重慶にあった蒋介石政府に、連合軍が物資を輸送するためのメイン道路の一つ。旧日本軍は、この輸送ルートを遮断するためにバマーに多くの兵を送った。現在も中国交易のための最大のルートとなっている。

99年8月の時は、行き交う車の数は少なかった。4・50年経ったと思われる10tトラックに、積載量をはるかに超える荷物を満載していた。今回は中古車が中心であるが、老朽化してエンストが心配されるようなものはほとんど見られなかった。また、ひっきりなしにトラック、乗用車、オートバイが走っていた。

道路の舗装状態は以前とほとんど変わらないが、幅は広がっており走り易くなっている。それよりも驚いたのは、貧乏くさい各集落がこざれいになっていたことである。最貧国のイメージはいささかも感じられない。



99年8月



11年3月



ムセの町を出立したのは 11 : 00 で、ナンベッカ 12 : 30、クッカイ 14 : 00 通過、ラショー着 15 : 50 であった。その間、オートバイに荷物を満載して走っているのが目立った。現代版担ぎ屋である。彼らは、途中にある集落に各々消えて行った。また、何百台の車が通関待ちをしている様子も見られた。車は、比較的新しいものが多く、以前と様変わりである。

#### ■ラショーの中国寺院（観音寺）

ラショーで、阿弥陀仏を祭る大乘仏教寺院を見る。ミャンマー仏教は南伝仏教で、上座部仏教である。上座部仏教には阿弥陀仏（アミターバ、アミターユス）信仰はない。本堂には阿弥陀仏が祭られ、脇侍として勢至菩薩、観音菩薩が祭られている。

ミャンマーの中国寺院は、関羽を祭る関帝廟が多く、新鮮な感じがする。当地に何故阿弥陀仏が祭られているのかは聞き洩らした。案内してくれた僧侶はミャンマー語が話せなかったし、周辺



の中国人集落は各戸が圍繞されて独自の景観となっている。

### (9) 3/24

#### ■ラショー



ラショーは、シャン州ではタウンジーに次ぐ地位にあり、中国貿易の中継点として発展している。ミッチーナは静かなたたずまいであったが、ラショーは少し喧騒な感じがする。ミッチーナの各店舗は、州都としては淋しいが、ラショーではそれなりに充実していた。しかし中心地にあるマーケットは、ミッチーナの方が充実している。

シャン族よりも中国人の活躍ぶりの方が目立ち、中国系ミャンマー人というよりも、いかにも中国人らしき人が多数見られた。その他、パオ族などの少数民族も散見される。

ラショーからマンダレー間の幹線路は、日本の地方の主要路程度に充実しており、片側 2 車線で上り下りの線が少し離れている箇所が多い。カーブのある所どころでは車が数珠つなぎになっているのが見られた。それだけ車の交通量が増えた証左でもあ

る。

#### ■ティーボー

ティーボーには、かつてシャン族の藩王国があった。シャン州の要所要所には藩王国があり、日本の江戸時代の各藩の様相を呈していた。最後のティーボーの藩王については、王妃であったオーストリア人のインゲ・サージェントが著わした“**Twilight over Burma**”という回想録があり、日本語版も刊行されている。西洋人から見たバマール政権に対する極めて偏見に満ちた内容になっているが、それでも、民主化至上主義の欧米人からは一定の評価を受けているようである。

旧藩主邸は現在も残っているが、老朽化が進んでいる。建物は予想以上に小さく、これが藩主邸かと思う程である。江戸時代の一般的な庄屋さんの家程度の規模である。朽ちたプールも残っているし、テニス・コート跡もある。しかし、日本のお殿様の絢爛さと比べると見劣りを感じない訳にはいかない。



訪ねた時は、最後の藩王の甥の子供になる 16 歳の男の子が一人で家を守っていた。政治的な問題があり、親族とは離れ離れになって暮しているとのこと。

ティーボーには、ナツ神殿、マハミヤムニ・パヤー、ボージョー・パヤーなど史跡に恵まれている。また伝統的な手工業も盛んで、小さい町ながら、ほどほどの賑やかさを感じさせられる。

ティーボーからピンウールウィンの間は坂道が多い。ピンウールウィンに着く手前にペイチンミヤウン洞窟がある。お釈迦さまが説法している様子など、様々な像やミニパヤーなどがあり、興味を引く。

### (10) 3/25

#### ■ピンウールウィン



ピンウールウィンは興味深い町である。イギリスの占領時代は、高原の避暑地として知られていた。そのために、当時の建物が町の各地に多数見られる。

町の中心には時計塔とマーケットがある。時計塔はイギリス統治時代の遺産である。前回来た時と比べると、マーケットの規模が格段に大きくなっていった。街に沢山あった土産

物屋は、ほとんどが姿を消しており、地元の購買が主体の店舗となっていた。住む人の購買力が向上したことが、その原因かと推測させられる。

当地にはシャン、バマー、パオ、インド、中国、グルカ、その他の少数民族が混在して暮しており、混血が進んで不思議な顔つきの人も見られる。



ピンウールウィンのセントラル・マーケット

#### ■サイバーシティ『ヤダナーボン』

・ Daw Zar Chi Oo、U Yan Naung Soe

ピンウールウィンの中心地から南西約 40km



の所に、サイバーシティ『ヤダナーボン』がある。以前、ヤンゴンの ICT パークにあるサイトロン社のテイントウンペ社長から話を聞いており、是非視察してみたいと思っていた。

機密性の高い施設なので、前以て許可を得ていないと中に入ることはできないが、幸いにして、私は多くの財界の方、IT 関係の有力者と昵懇の間柄であり、アポなしでもヤダナーボンの施設内に入ることができた。企業秘密もあり視察の内容を詳細に記すことはできないが、ホームページ“[www.yatanarpon.com.mm](http://www.yatanarpon.com.mm)”、業務用ソフト開発、インターネットと電話接続、CAD によるロゴ等の作成などの開発状況を視察することができた。

サイバーシティは 10.000 エーカーの広大な敷地を誇る。敷地内には工科大学や MCC などの企業が立地しており、基礎教育や実践的なトレーニングを行っている。ヤンゴンの ICT パーク内の建物と施設は老朽化が進み始めており、いずれはこの地がミャンマーIT の中心地となるであろう。



ヤダナーボン・サイバーシティ工科大学





MCC の研修学校

(11) 3/26

■ マンダレー

マンダレーはミャンマー第二の大都市であり、ミャンマー最後の王朝のあった所として知られている。好調に見られるミャンマー経済を反映して、街は賑わいを増している。しかし、中国化されているという一般的な見解と異なり、私にはいつの間にか中国がミャンマーに取り込まれてしまった印象を受ける。確かに中国人が多いが、中国を自己主張するよりも、ミャンマー人と仲良くやっけて行こうとしている感を受ける。そのために、ミャンマー化しているように思われる。

(12) 3/27

ヤンゴン 09 : 50 発、羽田着 22 : 10。日本を発った時は、厚木の町は地震の影響のため停電中で、小田急線のほとんどが運休中であっただけに、羽田周辺の明るさにはびっくりする。